



關大の轉換と學報の轉換

學長 神 戸 正 雄
法學博士

明治十九年創設せられて茲に五十八年の長き歴史を有つた、そして人間でいへばもう僅か二年で還暦を迎へやうとした此の昭和十九年に、丁度明治と昭和と年代こそ違へ同じ十九年に、わが懐しの關大も一大轉換を爲すことになり、そして其月誌たりし學報も之に伴ふて一大轉換を爲すこととなつた。凡べては、ただ、因縁といふ外はないのである。

私が關大の學長に就任したのは昭和十二年である。私は初めより自分の如き謙徳非才な者の能く其任に堪へる所でないとは思つて居たが、それでも過去の學的生活の長い體驗によりて何等か學徒諸君の纏ふべき方向を案内するの役には立たうかと考へ、其だけを自ら期待して此重任を敢へて御引受けしたのであつたが、此期待は實は外界の

情勢の推移により半ば水泡に歸した。

私の就任した十二年四月から三箇月を経て同年七月七日に日支事變が始まり爾來、大學は其様相を變じ、學問の研究指導の道場たるのみでなく、心身錬成の兵營と化しつゝあつたのである。私は眞先きに此事あるを見透したので學園内に忠靈塔を建立して、學生の日常生活の魂の安息所を作つた。其後昭和十六年十二月八日、大東亞戰爭の初まるに至つては、日本は最早如何なる長期戦をも辭せざるの大決意を以て、眞に國民の總力を擧げて戦ひ抜かなければならぬ羽目に追ひ込まれ、否進んで之に突入したのであり、かくなる上は、大學機構の改新もが不可避となつたのである。

事態此の如きの間に、自分の如き純粋なる學究者にては既に已に大學の指

大正十一年六月十五日創刊
昭和十九年三月十日印刷
昭和十九年三月十五日發行

編輯長 神 戸 正 雄
發行人 神 戶 正 雄
大正市北區堂島
上三丁目十五番地
印刷所 西大 谷 口 印刷 所
大東市大滝區長崎
中地二丁目十二番地
發行所 關西大學學報局
會員登錄番號 〇六〇〇〇四

導者としての資格を少からず失つて居たのである。唯だ々々自らの良心に背きつつも、漸く傳統によりて其責を塞ぎつつあつたのみである。今から思へ

謹告

緊迫せる國內情勢の要請により、學内報道機關誌としての「關西大學學報」は本誌を以て一應終刊とすることになり、同時に學報課も廢止されることになりました。回顧すれば大正十一年創刊以來わが關西大學の機關誌として、殊に學園と校友との唯一の連絡機關として聊か其の役割を果し、又夫れ自身大學發展の歴史を録するものでありましたが、國家の要請に従ひ進んで發展的解消を遂げる次第であります。即ち今後は研究論文を收載する純然たる學術雜誌として新しき使命の下に再出發することになりました。校友各位の本誌に對する多年の御愛顧を感謝すると共に、引續き御支援をお願い致します。詳細は第四頁を御参照下さい。
昭和十九年四月

ば洵に恥入つた次第である。

其間に私大は理科系なき限り存続を許されないのであらうといふ風説も出るやうになり、校友の間に早く、本學にも理科系學科を備へよとの聲が揚り、此に動かされて昭和十七年の十一月に私が初めて文部省に出頭して關大にも理科系學科設置の内意あり、其設置には如何なる手續を探るべきやを尋ね、且、其實現の曉に於ける文部省の同情ある援助を乞ふ旨を頼み込んだのである。此は其節、好意ある解答に接したので、之を關大の理事者に報告した。爾來、當局に於て非常なる努力を之が設立準備の爲めに拂はれたるの結果、昭和十九年三月二十日、關西工業專門學校の名の下に設立認可が下つたのである。此認可の下るまでには幾多、當局者の苦心努力の拂はれたことはいふまでもないけれども、最終の確定を見る爲めに私自らが三月十九日(日曜日)二十日(月曜日)の二日に亘つて文部省に奮勵の爲めの努力を拂つた(二十一日は春季皇靈祭日)ことは自分としての思ひ出の一つとして長く記憶に残るところである。

理科系學科の設置は兎にも角にも此れで一應整備がついた。文科系學科は何うなるか、皆な人の案じ煩つた所であつた。然るに昭和十八年九月の園内態勢強化要項に依れば、我が關大の如きも大學としては存続せず、唯だ専門學校としてのみ残るといふ情勢であつ

た。當時はそうなる場合を豫想して準備を進める外なかつたのであるが、事態は漸次變化して、十二月下旬になり、各私大の用意如何では大學本部の存立が可能なりとの見込立ち、本學に於ては十九年一月早々、敢へて學部存續の方針を確立して實は關西の私大中では眞先きに之を文部省に具申したのである。ただ學部、豫科ともに定員は在來の約三分一に切下げられ、専門部は在來の約二分一に切下げられ、尙其上にも徴兵適齡の一箇年引下の行はるる事情の下に學校收入の非常なる減少を覺悟しなくてはならず、茲に學校の機構に一大改革を斷行しなければならぬやうになつた。其れで學部にありては在來の法文學部を法學部とし、經商學部を經濟學部と爲し、從來の文科、政治科、商業科を廢止し、専門部にては英文科の新人學生の募集を取止めとし、其他附帶の事項を定め、凡べて學科の整理を行つた。併し別に研究機關の充實を期し、在來の南方文化研究所を人文科學研究所と改めて教授中より數名を擧げて其研究員とした。其れだけでは足りない。何としても教授數をも減じなければならぬ。其處で洵に御氣の毒ではあつたが、一應全教授の辭表の提出を願つて置いて、其中から留任していただき、他の方は勇退して頂くこととした。尤も教授を引退された方の中にも後より講師として残つて、

助けていただくこととした方が少からずある。此れで本學は従来よりは學生生徒の員數も減じ、教授數も減じ、規模が小さくなつたことは免れないけれども、一方に理科系の専門部が出来て、他日の發展の礎石が据へられたし、他方に學部としても法學部、經濟學部の二學部を備へ、兎にも角にも單科大學ではなくて綜合大學たるの形を備へ、他日時機到來すれば大に發展し得るの土臺が出来た。そして人文科學研究所もが其規模の小さい乍らも將來の期待をかけるだけの優秀性を有つたものである。

それで本學は茲に能く此昨年から今年にかけての大受難を切り抜け得たのであり、本學の將來の爲めに御同慶に堪へぬ次第ではあるが、此改革に際して多數の同僚教職員に犠牲者を出したについては、其局に當りたる自らとしては最も残念に思ふ次第であり、唯さへ時局下の學校指導者として自ら不適任と感ずる私の長く職に止まることを忍び得ず、退職者諸君と行を共にすることとした次第である。

學報も實に此學校整備の餘波を受けて學校經濟より分離することになり、在來の學報は之を以て最終號とするにととなつた。最も長い間、献身的努力を致された神屋敷主任に對しては、特に感謝の意を表しなければならぬ。

學内報

工業専門學校設立許可

豫て設立認可申請中の關西工業専門學校は三月二十日附を以て認可された。

學科内容は一般機械專攻科、航空機專攻科、船用機關專攻科の三科にして、定員は各五十名、修業年限三ヶ年、校舍は天六校舍を使用する。然して初代校長に元大阪高等工業教授工學士吉木一朗氏が就任せられた。

協議員會開催

―財團法人役員改選―

本年度通常協議員會は去る三月廿六日(日)午後二時より天六學舍會議室において開催、昭和十七年度決算並に昭和十九年度豫算の承認に引つゞき任期満了につき役員選舉に移り、理事として吉田音松、内藤正剛、矢口家治、武田宣英の四氏重任、遣部逸太郎氏新任に理事に就任、監事に竹田省氏重任、原田鹿太郎氏新任された。

尚協議員補缺選舉の結果織田佐代治、神宅賀壽恵、小山平治、谷田俊二郎、森内梅吉の五氏を擧げ、又相談役なる理事の顧問機關を新に置き板野友造、白川朋吉、松本靜史、宮本英倫の四氏を推薦した。

尚工業専門學校設立經緯につき委細報告があつた。

人文科學研究所新設

今次の學内機構の整備に當り、從來の南方文化研究所を改組して、人文科學研究所を新設されることとなり、研究所員は別記の諸氏が任命される豫定である。

大學豫科、専門部入學試験

昭和十九年度大學豫科並に専門部の入學試験は左記の通り施行され、志願者及入學許可者數は次の如くである。

尚専門部第一部の高等商業學科、及第二部商業學科は共に經營科と改稱し、第二部文學科英語專攻科は本年度は募集しなかつた。

日	時	志願者	許可者
大學豫科	三月廿五日	五七	二〇
專門部一部	三月廿二日	一、一〇	二〇〇
	廿三日	一、一〇	二〇〇
内譯	三月廿二日	三〇三	一〇〇
法	三月廿二日	六六六	一〇〇
經濟	三月廿二日	四三	一〇〇
內譯	三月十七日	九五	三五
法	三月十七日	二六九	一五〇
經濟	三月十七日	二七〇	一五〇
國	三月十七日	二五	一〇〇
漢	三月十七日	一〇五	五〇

工業専門學校入學試験

新設の關西工業専門學校入學試験は四月九日第一次考査、同十三日第二次考査を施行し、同十六日入學許可者を發表した。

一般機械科
航空機科
船用機關科

志願者許可者
一、四一 吾
七、七〇 吾
八〇、四 吾
二、七五 吾

入學式舉行

依願解職

教授 安藤 光
書記 垂水誠二郎
(二月十日付)

書記 尾崎 信夫
(二月廿九日付)

會計課主任 桂 志雄

專門部教務課主任 松崎 義盛
免庶務課主任事務取扱兼務(各通)

專門部教務課主任 松崎 義盛
專門部教務課主任 松崎 義盛

任專門部學生課主任兼生徒主事補 若松 新吾

任學部教務課主任 池田信之助

任專門部教務課主任 書記 田中治良大夫

任庶務課主任 安井 章吾

工業專門學科擔任

新設の關西工業專門學校の本年度學科擔任は左の通りである。

任書記(各通)

教授 堀 正人
武内 省三
村上 喜貞
賀來 俊一
吉田 一枝
瀧澤喜子雄
水谷 撥一
三木 純吉
西井 克己

同 田中治良大夫

同 栗須 賢一

同 增田 實

同 白曼 卓雄

同 安井 章吾

同 池田信之助

同 書記 田中治良大夫

同 若松 新吾

同 松崎 義盛

同 桂 志雄

同 尾崎 信夫

人事異動

岡本勝治郎
上道 直夫
三枝樹正道
三谷 友吉
中川庸太郎
佐伯 三郎
菅 守常
村田數之亮
廣嶺 捨三
國藏 胤臣
神屋敷民藏
可野敬四郎
廣澤政太郎
山田 六郎
岡橋 保太
伊關 國雄

依願解職
校長 小泉 幸治
教諭 四辻 詮
同 瀧美元次郎
同 小島 正顯
同 政瀧 法城
同 岡師 親徳
同 津田 長雄

同 岡本勝治郎

同 上道 直夫

同 三枝樹正道

同 三谷 友吉

同 中川庸太郎

同 佐伯 三郎

同 菅 守常

同 村田數之亮

同 廣嶺 捨三

同 國藏 胤臣

同 神屋敷民藏

同 可野敬四郎

同 廣澤政太郎

同 山田 六郎

同 岡橋 保太

同 伊關 國雄

同 木村 健助

同 大小島眞二

同 河村 宜介

同 植田 重正

同 小泉 幸治

同 菊地金次郎

同 土橋 四三

同 廣田 利一

同 小松 市郎

同 中村 虎吉

同 和田 豊二

神戸學長辭任

かくほう抄

諸手續の關係上、未だ公表に至らざるも三月卅一日附を以て學長を辭任さる。尙同様に既に決定の人事異動を左に附記する。

▽岩崎・磯部・中谷・森川、山木戸の各教授及高木助教、新設人文科學研究所研究員に任命(兼任)

▽和田豊二教授、關西甲種並に第二商業學校長に任命。

▽野村次夫教授、教授を辭し、大藏省囑託に赴任。

▽谷口宗一氏、豫科教務主任を辭し、松下電器産業會社に入社。

▽里見復二氏、專門部學生課より豫科教務主任に任命。

關西甲種商業學校教諭
校長 和田 豊二
教授 和田 豊二
(四月一日附)

關西甲種商業學校教諭
校長 小泉 幸治
教諭 菊地金次郎
同 土橋 四三
同 廣田 利一
同 小松 市郎
同 中村 虎吉
(以上三月卅一日附)

關西甲種商業學校教諭
校長 堀 正人
武内 省三
村上 喜貞
賀來 俊一
吉田 一枝
瀧澤喜子雄
水谷 撥一
三木 純吉
西井 克己
(以上三月一日付)

校友欄

常任幹事會

三月十日午後五時より天六學會に於て學内整理に伴ふ諸問題につき校友會としての對處策を協議した。

四月四日午後五時より天六學會に於て開催、學長留任懇請、退職諸教授謝恩、學費繼續の諸件につき協議した。

實行委員會

三月廿日午後五時より新大阪ホテルに大學協議員諸氏を招待し、實行委員との懇談會を催した。

四月十八日午後五時より軍人會館に於て、先般決定の大學新理事、監事、相談役、協議員を招待し、今後の大學經營問題について懇談した。

秀麗會 (大連支部)

第九三回例會 一月廿日午後六時浪速町「濱作莊」に臨時總會をかねて例會開催、出席者十七名、先づ副支部長選任の件につき協議の結果満場一致秀島全治氏を推し、校友總會決議實行委員會の経過報告を平井氏より説明あり、本會の俱樂部設置問題について種々検討して總會を終り、例會出席者附を發表賞品を贈り、學歌齊唱して九時散會。

第九四回例會 二月十九日午後六時海運奉公願食堂に於て、福昌公司大連工事課より同社新京支店に榮轉の小川立朝君の壯行會を兼ねて開催、校友會評議員

平井三朗氏より關西工業專門學校の設立並に改革進行途上の母校の現状について實行委員會の其の後の経過報告について之が説明あり、遂に委員諸兄の熱意ある努力に對し萬腔の感謝を捧げた。

上海支部

三月例會 四日午後六時半より谷口氏の招待により日本俱樂部に於て開催、注野支部長より一、關西工業專門學校の新設、二、母校新學制の内容の報告あり、人文科學研究所に對する積極的援助の件、出征校友に寄書送呈の件を決定し九時散會、出席者廿五名。

奉天支部

二月例會 廿六日午後六時明治製菓ダリルで開催、出席者十三名、母校に工科系の專門學校設立の快報をき、其の發展を祈念し、又本會より献納のグライダも近く大空に翔飛するの樂しさを語つた。本會は毎月例會を開催してあるが、各支部と連絡して母校の發展を計り度いと希望してゐる。

臺灣支部

春季定期總會を一月廿日午後六時より臺北新店溪畔の「紀州庵」に開催、小谷幹事長より本島在住校友の動靜並に會計報告あり、缺員の幹事に戦地より歸還の米村、原田兩勇士を推し、小林、小川兩氏の土産に陶然たり。學歌を高唱して九時半閉會した。出席者一中村支部長、臺中の福島通大氏ほか十一名。

校友各位に告ぐ

第一面謹告の如く學内戰時措置として従来の報道記事掲載の學報は本號を以て終刊とし、今後は同誌名の下に學術雜誌として新發足します。

就ては校友會は母校支援の意味に於て右發行費を負擔することとに致し、従つて本年度は臨時措置として校友會費年額參圓の外に金貳圓也を會員各位に御出捐願ふ事になりました。

従つて一時拂又は數年度分御納入の方は昭和十九年度分として金貳圓也御追送下さる様お願い致します。

尙本年度校友會費の納期に立至つて居りますから、至急御拂込み下さい。

○昭和十九年度校友會費

金五圓

○一時拂又は數年度分既納者

本年度特別負擔 金貳圓

昭和十九年四月

關西大學校友會

振替大阪五五五九四番

編輯後記

己にして始めあり、又終なるべからず。學報もわが大學の存續する限り、敢へて三百年後までも存續するであらうと思はれたが、國の總力を擧げて偏に勝利の道に邁進前、國內態勢強化のため學制の劃期的なる改革が發表され、わが大學も機構の改新整備の結果、學報も本號を以て終刊となつた。創刊より數へて二十一年、本誌も大東亞戰爭に應召した譯である。

顯るに大正十一年わが關西大學が大學令に依る大學に昇格したその記念すべき年に當時の宮島專務理事によつて創刊され、大學の擴張發展期に當りその機能を十全に果して來たものである。その後の大學の經營方針は紙面に反映し、昭和九年には研究論集として分發し、學報は専ら學内の報道機關として校友との連絡に當つたのであるが、此度研究論集も第十四號を以て終刊、學報局も廢止となり、誠に轉た感慨に堪へないものがある。編輯子としては辰巳、森川、霜村、遠藤諸先輩の後を享けて十分な御期待に副ひ得なかつた事は申稱ない次第、多年の一方ならぬ御恩顧に對し紙上にて深甚の謝意を表します。

尙學報は謹告の告く學術雜誌として更生することになりましたのは一に校友會幹事各位の御盡力による處にて大學の爲にも海に御同慶に堪へない次第であります。(神屋敷)